



TITLE:

古典復興運動に抗して：プルースト  
「ネルヴァル断章」再読の試み (吉  
田城先生追悼特別号)

AUTHOR(S):

小黒, 昌文

---

CITATION:

小黒, 昌文. 古典復興運動に抗して：プルースト「ネルヴァル断章」再  
読の試み (吉田城先生追悼特別号). 仏文研究 2006, S: 217-243

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138070>

RIGHT:

## 古典復興運動に抗して

——プルースト「ネルヴァル断章」再読の試み——<sup>1)</sup>

小 黒 昌 文 Masafumi OGURO

« Traditionel, bien français ?

Je ne le trouve pas du tout. »

Marcel Proust

マルセル・プルースト Marcel Proust (1871-1922) の小説美学がジェラール・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval (1808-1855) の作品に負うところは極めて大きく、この点についてはすでに数多くの研究がなされてきた<sup>2)</sup>。なかでも、創作手帳や草稿帳に残されたネルヴァルをめぐる思索の痕跡は、来るべき小説作品の生成と不可分なものとして、様々な角度から分析されている。実際、眠りや夢、「無意志的記憶」« mémoire involontaire » や「回想」« ressouvenir » の法則に対する関心はもちろんのこと、創作に適した表現形式の模索をめぐる躊躇いや揺らぎまでもが、二人の作家の深い親和性を裏付けている。また、系譜学や土地の名前、あるいは「起源の土地」に対して注がれた視線などに着目することもできるだろう。生涯を賭して書かれた『失われた時を求めて』<sup>3)</sup> におけるネルヴァルへの直接の言及は2回のみであるが<sup>4)</sup>、それとて、この作家に対するプルーストの関心が薄れてしまったことを示すものではない。この小説において言及回数が必ずしも重要性和比例しないことは、よく知られた事実である。

本論考が分析の中心として取り上げるのは、プルーストの死後『サント＝ブーヴに反論する』に収録されるに至った、ネルヴァルに関する未完の草稿断章(以下、ネルヴァル断章と呼ぶ)である<sup>5)</sup>。だが、この断章で問題にしたいのは、これまで幾度となく考察の対象となってきたネルヴァルとの美学的な近接性ではなく、『シルヴィ』についての思索を通して素描されるプルースト独自の小説美学と、同時代の文学的・批評的な流れとの密接な関わりである。そして多種多様な当時の文学動向のなかにプルーストの批評的実践を改めて位置づけることによって、先行研究とは幾らか異なった視角から、この断章の再読を

試みたいと思う。20世紀初頭の文学界は、「不明瞭で、矛盾をはらみ、不確かな」数々の文学動向の絡み合いを一つの特徴とし、当時の人々の眼にも「非常に多様で、絶えずその様相を変える」ものと映っていた<sup>6)</sup>。そのように錯綜した流れのなかで特に注目に値するのは、第一次世界大戦に先立つ約10年あまりのあいだに隆盛を極めた「古典復興」« *renaissance classique* » とよばれる文学的・社会的潮流である。というのも、ネルヴァルをめぐるブルストのテキストには、この運動についての示唆的な痕跡の数々が残されており、他ならぬこの潮流への反発が作家のネルヴァル理解を深め、さらには作家独自の見解を芽生えさせる重要な要因の一つとなっているように思われるからである。

## I. 20世紀初頭の古典復興運動

まず、ブルストのテキストの具体的な分析に入るまえに、20世紀初頭に巻き起こった古典復興運動とは一体どのような動きであったのか概観しておきたい。1900年代の初めから「古典復興」« *renaissance classique* » という名称を与えられて激しい議論の対象となり、とりわけ1907年頃から第一次世界大戦開戦前夜にかけて主要な文学的トポスの一つを形成していたにもかかわらず、この文学動向は長いあいだ文学史のなかでほとんど完全に忘れ去られてきたといっていよい。多くの芸術領域で次々と革新的・前衛的な運動が生まれた激動の時代にあって、過去遡及的な性格が後世の関心をひきつけ得なかったことが、こうした忘却を招いた主な要因であったといわれる。アポリネール研究の大家でもあるミシェル・デコダンは、1895年から1914年にかけてのフランス詩の変遷を研究した大著『象徴主義的価値観の危機』のなかでこの動向に光を当てているが、恐らくはこれが、古典復興をめぐる文学史的な視点からなされた最初の詳細な考察であろう<sup>7)</sup>。また、近年ではウィリアム・マルクスが近代批評の誕生と古典復興との密接な関わりについて考察し、これまで顧みられなかった文学動向について興味深い意味付けを行なっている<sup>8)</sup>。ここで、この二人の批評家の研究に依拠しながら、古典復興運動の特質をまとめてみよう。

デコダンはよれば、この動向は何よりもまず、伝統という名の過去との絆が断たれてしまうことへの不安をかかえた時代の切実な要求を端的に示す兆候であった。デコダンは、「復興」« *renaissance* » と名づけられたこの運動の本質が、「起源への回帰」« *retour aux sources* » を希求する点にあることを的確に指摘したうえで、次のように書いている。

[...] il s'agit de ramener un art qu'on juge désincarné aux réalités naturelles et à la tradition : en face de l'atmosphère artificielle des cénacles parisiens, l'enracinement provincial ; en face de l'originalité à tout prix, la fidélité aux vertus classiques. À la renaissance provinciale répond une renaissance classique, et les deux mouvements sont souvent étroitement liés.<sup>9)</sup>

「根ざすこと」、すなわち「起源」とのつながりを確かなものとすることに対する欲求は、国政における地方の役割の増大や、民俗学の発展などに後押しされた地域主義と相まって著しい高まりをみせる<sup>10)</sup>。古典復興運動は、「パリ」対「地方」という伝統的な構図を下敷きとした時代の流れに深く関わると同時に、国外からのイデオロギーの流入やコスモポリタニズムへの抵抗とも結びつくことによって、文化的、社会的、政治的な要素が錯綜した大きな流れを形成する。ウィリアム・マルクスは、当時、古典主義的価値観への回帰を最初に唱えたのが『知性の未来』（1904）を著わしたシャルル・モーラス Charles Maurras（1868-1952）であったという思想的な背景を踏まえたうえで、古典復興の特質のひとつとして「美学とイデオロギーとの混淆—あるいは混乱—」を挙げている。事実、古典復興という時代の要請は、「根ざすこと」« enracinement »への欲求やモーラス主義と響きあうことによって、国家主義や反ドレフュス主義、反ユダヤ主義に通じることにもなる。古典復興の流れに賛同した批評家ガストン・ソヴボワ Gaston Sauvebois が1911年に発表した著作『古典主義の曖昧さ』の次の一節には、こうした可能性がはっきりと映し出されている。

Retour à tout ce qu'on avait abandonné, abjuré, brûlé ; retour au fond national ; retour, enfin, au Classicisme parce qu'en lui est la plus grande discipline, parce qu'il a produit des chefs-d'œuvre éternels, parce qu'il manifeste l'essence du plus pur génie français. — Ainsi seraient repoussés les mauvais apports étrangers, ainsi seraient réintégrées nos meilleures facultés, notre vraie force, notre plus sûre méthode pour la production littéraire.<sup>11)</sup>

「古典復興小史」と題された章において、古典復興運動の文学史的な位置を定義する試みのなかに挿入されたこの一文は、デコーダンがこの運動のうちに認めた「秩序」« ordre »と「規律」« discipline »に対する強い欲求の存在を裏付けるとともに、その「もっとも純粋なフランスの精髓」に対するこだわりが、自民族至上主義に直結する思想を孕んだものであることをはっきりと示してい

る。

文学の実践の場において古典復興を提唱する人々が目指したのは、ギリシャ・ローマを規範とする古典主義的な諸形式への「回帰」であり、デコーダンの引用にも見た「古典的な美德」*« vertus classiques »* — *« clarté »* *« ordre »* *« mesure »* *« goût »* *« harmonie »* といった概念—を詩や小説において復権させようとする流れであった<sup>12)</sup> (ただし、そうした主張は、実作よりも批評的な試みとして実を結ぶことのほうが多かったとも言われている<sup>13)</sup>)。こうした古典回帰の傾向は反高踏派・反象徴主義的立場を前面に出し、とりわけ詩の領域においては、「自由詩派」*« vers-librisme »* に対する反発や、ステファヌ・マラルメ Stéphane Mallarmé (1842-1898) に対する激しい批判となってあらわれた<sup>14)</sup>。また、モーラスの著作の数々を引くまでもなく、古典復興支持者たちが反ロマン主義的態度を鮮明に打ち出していたことは容易に想像できるだろう。なかでも、文芸批評家にして哲学教師でもあったピエール・ラセール Pierre Lasserre (1867-1930) が1907年に発表した『フランス・ロマン主義』はその典型である。ロマン主義批判の系譜をまとめあげ、これを正当化する試みであったこの闘争の書は、古典復興に新たな教義的基盤をもたらすと同時に、激烈な論議を巻き起こして、この問題をめぐるアンケートが新聞や雑誌を賑わす契機ともなった<sup>15)</sup>。

またマルクスによれば、古典復興は一つの流派のように体系的に組織された「運動」であったというよりも、種々の流れの足並みが共通した目的のもとに揃うことでできた「星雲」*« nébuleuse »* にちかいものであった。しかし、それがいかに「混沌としたもの」だったとはいえ、古典復興のスローガンは以下のように端的に要約され得るものだったことも確かであった。マルクスは次のようにまとめている。

[...] les mots d'ordre généraux du mouvement se laissent résumer assez facilement : promotion d'une littérature d'inspiration nationale et provinciale ; retour à la tradition classique du XVII<sup>e</sup> siècle, aux formes poétiques régulières, à la clarté ; anti-symbolisme de principe.<sup>16)</sup>

規則正しさや明解さへの極端なまでのこだわりや、フランス文化の一つの頂点と考えられていた17世紀文学への傾倒なども、古典復興の大きな特質であった。マルクスが明らかにしたように、こうした傾向は第一次世界大戦の混乱とともに解消するものの、1930年代初頭にいたるまで、文芸批評に関する多くの議論

に影響を与えつづけることになる。そして、戦前の古典復興の高まりのなかで深められたブルーストの問題意識（芸術の革新性や、芸術における進歩の概念、模倣の域を出ることのない「古典回帰」の限界など）も、この流れのなかで広い射程を獲得し、作家の最晩年に至るまで、折に触れてその言説のなかに顔を出すことになるだろう。本論考では、ブルーストのうちにこうした視点が芽生えた時期に分析の重点をおくが、その際に興味深いのは、ネルヴァルに関する批評的な実践の時期（1908-1909年頃）が、古典復興隆盛の幕開けと重なっているという事実である。なぜなら、両者のパラレルな関係を念頭に置き、既述した古典復興に関する幾つかの特徴を踏まえることによって、これまでとは違った角度からネルヴァル断章を再読することが可能になるからである。

## Ⅱ. 歪められたネルヴァル像

ブルーストの死後「ジェラルド・ド・ネルヴァル」と題されて『サント＝ブーヴに反論する』に収録された10ページあまりのテキストは、二つの草稿帳一カイエ5（N.a.fr. 16645）とカイエ6（N.a.fr. 16646）——に別々に書き残された断章によって構成されている。テキスト全体の約五分の四を占めるカイエ5の断章（以下、前半部と呼ぶこととする）は、ジュール・ルメートル Jules Lemaitre（1853-1914）が1908年に出版した著作『ジャン・ラシーヌ』<sup>17)</sup>における『シルヴィ』への言及が直接の契機となって書かれたものであり、カイエ6の断章（以下、後半部と呼ぶ）は、モーリス・バレス Maurice Barrès（1862-1923）が1907年1月27日に行なったアカデミー・フランセーズ入会演説と、この演説に対するウジェーヌ＝メルキオール・ド・ヴォギュー Eugène-Melchior de Vogüé（1848-1910）の返答に触発されて書かれている<sup>18)</sup>。

ここで注意しなければならないのは、ネルヴァルをめぐるこれらの思索は、反サント＝ブーヴという命題のもとに綴られたテキスト群の一つと位置づけられていながらも、必ずしもこの批評家を標的としてはいないという点である。たしかに、プレイヤード版の注釈にもあるように、ブルーストはサント＝ブーヴのネルヴァル観（『新月曜閑談』に見られる「le commis voyageur littéraire de Paris à Munich」や「l'aimable et gentil Gérard de Nerval」といった表現）に否定的な態度をとっていた<sup>19)</sup>。しかし、ネルヴァル断章での批判の矛先が、近代文芸批評の祖というべき存在とは別のところに向けられていたことは、前半部冒頭の一節にすでに示されている。

Ce jugement semble surprenant aujourd'hui où on s'accorde à proclamer Sylvie un chef-d'œuvre. Le dirai-je pourtant, Sylvie est admirée aujourd'hui si à contresens à mon avis, que je préférerais presque pour elle l'oubli où l'a laissée Sainte-Beuve et d'où du moins elle pouvait sortir intacte, dans sa miraculeuse fraîcheur. (CSB, 233. 強調引用者)

同時代の作家に対して的確な評価を下せないサント＝ブーヴ以上にブルーストを苛立たせていたのは、20世紀初頭におけるネルヴァル受容の実情、とりわけ『シルヴィ』をめぐる伝統主義的な作品解釈であった。これに対する反発は、ネルヴァル断章の前半部と後半部に一貫した主題でもある。仮に好意に満ちた解釈であったとしても、それが「的を外した」ものであるかぎり、作品の本当の美は損なわれ、歪められてしまう。それに比べれば、サント＝ブーヴがネルヴァルを追いやった忘却のほうがまだしもましである。このように主張するブルーストは、芸術作品に施される歪んだ解釈をめぐる問題系を敷衍するべく、次のような例を挙げている。

La sculpture grecque a peut-être été plus déconsidérée par l'interprétation de l'Académie, ou la tragédie de Racine par les néo-classiques, qu'elles n'auraient pu l'être par un oubli total. Il valait mieux ne pas lire Racine que d'y voir du Campistron. Mais aujourd'hui il a été nettoyé de ce poncif et se montre à nous aussi original et nouveau que s'il avait été inconnu. Ainsi de la sculpture grecque. Et c'est un Rodin, c'est-à-dire un anticlassique, qui montre cela. (CSB, 233. 強調引用者)

「アカデミー」や「新古典派」の視点からなされる古代彫刻や古典の作品解釈への不信感が表明されるいっぽう、当時から優れて現代的な彫刻家と考えられていたオーギュスト・ロダン Auguste Rodin (1840-1917) が、ギリシャ彫刻の真の理解者として引き合いに出される。この「ロダン」という選択肢に注目しよう。ブルーストのこのようなロダン観は、『胡麻と百合』翻訳の序文「読書の日々」の原注のひとつで、すでに示されていた<sup>20)</sup>。そのなかでロダンは、対極に位置づけられるもののうちにこそ最良の理解者を見出すことができるというブルーストのテーゼ（たとえば、「ロマン主義者」こそが「古典派」の第一の解説者であるという考え）を、芸術の領域にまで広げる好例として取り上げられていた<sup>21)</sup>。みずから同注でレフェランスを示しているように、ブルーストは批評家カミーユ・モークレール Camille Mauclair (1872-1945) が1905年5月15日付の『ラテン復興』 *Renaissance latine* に寄せた論考「ロダン氏の技法と

象徴主義に関する覚え書き」に大きな共感を覚えたようである<sup>22)</sup>。モークレールはこの論考で、彫刻家自身の言葉をふんだんに盛り込みながら、ロダンが示した革新性の背後にある古代ギリシャ彫刻への深い理解を明らかにしたのだった。1908年にブルーストがふたたびこの彫刻家について語ったのは、この点を念頭に置いたうえでのことである。その際に、1905年の時点では用いられていない「反古典的」« anticlassique »という表現を取り入れている点は示唆的である。間接的にはあれ、こうした語の選択は、断章執筆時のブルーストが同時代の新古典主義的な流れとその「反動」とを意識していたことを窺わせる。また、モークレールを引くまでもなく、ロダンの作品群が優れて「象徴主義的」であったことを考慮すれば、この芸術動向を敵視する古典復興運動の支持者たちの目にロダンが「反古典的」と映ったことは想像に難くない。ブルーストがおこなったロダンへの言及は、決して恣意的な選択に基づいたものではなかったはずだ。

では、古代ギリシャ彫刻に対するロダンに匹敵するような良き理解者に恵まれていなかったネルヴァルは、当時、いったいどのようなイメージを付されていたのだろうか。ブルーストは次のようにまとめている。

Il est convenu aujourd'hui que Gérard de Nerval était un écrivain du XVIII<sup>e</sup> siècle attardé et que le romantisme n'influença pas, un pur Gaulois, traditionnel et local, qui a donné dans *Sylvie* une peinture naïve et fine de la vie française idéalisée. (CSB, 233)

ここで簡潔に描きだされた「<sup>こんにち</sup>今日の」ネルヴァル像が、伝統主義的なフィルターを通して捉えられたものであることは明らかであり、そこに古典復興運動の影響を見ることは困難ではない。古典復興の文脈において、ネルヴァルがロマン主義の系譜に組み込まれることはなく、ましてや象徴主義の先駆者として定義されることなどない<sup>23)</sup>。そこにはむしろ、それらの文学動向との関係を積極的に否定することで、ネルヴァルを古典主義的なコンテキストのなかに回収してしまうという強い力が作用しているといえる。ブルーストは、一部の文学関係者以外からはほとんど忘れられていたネルヴァルが、忘却の淵から掘り起こされることで辿りつつあったこの命運に、強い苛立ちを覚えていたのである。

1903年11月に創刊された文芸雑誌『レ・マルジュ』*Les Marges*の書き手であった批評家ウジェーヌ・モンフォール Eugène Monfort (1877-1936) は、その創刊号に「愛し得るロマン派作家ジェラルド・ド・ネルヴァル」« Un



Romantique que nous pouvons aimer. Gérard de Nerval » と題された記事を寄せている<sup>24)</sup>。モンフォールはここで、ヴィクトル・ユゴーが体现したロマン主義を痛烈に批判するのだが、批評家の目的は、否定すべきロマン主義時代を生きたはずのネルヴァルを、例外的な存在として肯定的に捉えることであった。モンフォールは、ネルヴァルを取り巻く環境や知己にロマン主義的色彩が強かったことを認めながらも、ネルヴァル自身の芸術が全くその影響を受けなかったと主張してこれを高く評価している。そして、『ロマン主義の歴史』に書きつけられたテオフィル・ゴーチエの証言を取り上げながら、「ネルヴァルがロマン主義者たちのなかで唯一の文人であり、[血筋、気質、そして精神において]他のだれよりもフランス的であった」ことを強調するのである<sup>25)</sup>。また、モンフォールは『レ・マルジュ』誌で展開してきた自分の論理を正当化する目的で書いた1907年4月の記事で、「愛すべきロマン派作家」であるネルヴァルが「ロマン主義時代の間、古典的であるすべを心得ていた」ことを、あらためて強調することになる<sup>26)</sup>。こうした視点が、プルーストの批判するネルヴァル像の生成に一役買っていたことはいうまでもない。

いっぽう、フランスの理想的な生活の舞台となる自然豊かな景観を、優美な筆致で描く「風景画家」としてネルヴァルを位置づける傾向も存在した。1906年9月、モーリス・バレスは、スポーツ専門紙のはしりである「ロト」紙 *L'Auto* にネルヴァルに関する記事を寄せて、当時まだ決して知名度が高かったとは言えないこの作家について、次のように書いている。

Aux automobilistes, cyclistes et amateurs de « footing », à tous ceux qui aiment parcourir les environs de Paris, je recommande les petits livres d'un grand artiste, de qui le nom n'est arrivé qu'une fois, à la suite d'une circonstance tragique, aux oreilles du grand public. Je veux parler de Labrunie, qui signait du pseudonyme de Gérard de Nerval. Ils y trouveront de nouveaux motifs de se plaire dans cette île-de-France dont personne mieux que Nerval n'a senti la grâce spirituelle et aisée.<sup>27)</sup>

ネルヴァルの作品が、文学的教養を備えた人びとのみならず、広く一般大衆にも受け入れられ得ることを意識したバレスは、いたって平易な語り口で、この「ヴァロワ地方の画家」ネルヴァルが『シルヴィ』で描く情景と人々の豊かな日常とを結びつけている。この例に見られるように、新古典主義的、伝統主義的なコンテクストからは離れたところでも、人々は『シルヴィ』という作品に込められたイル＝ド＝フランスの森林の美しさや、そこを舞台として展開する

豊かな田園生活と庶民の日常的な営みに惹きつけられていたのである。たとえば、1886年にリュドヴィク・アレヴィ Ludovic Halévy (1834-1908) の序文を付けて出版されたエディションに組み込まれている42枚の挿絵は、そのどれもが「素朴で繊細」であり、当時の人々の『シルヴィ』観の一端を見事に証言しているといえよう【図版】<sup>28)</sup>。

だが、物語の舞台となるヴァロワ地方やイル＝ド＝フランスは、古典主義的価値を称揚する人々にとって、単に風光明媚な場所として考えられていたわけではない。フランス史上もっとも古い地域の一つであり、ラシーヌやラ・フォンテーヌをはじめとした古典主義文学の巨匠たちとも結びついたこの地方は、「フランスの心臓」と呼ばれるにふさわしい歴史的価値を帯びている。古典復興支持者たちは、この土地を美しく描き出したネルヴァルの作品世界に、国家の伝統やフランス語の顕揚につながるモチーフを探るのである。ジュール・ルメートルがラシーヌ論のなかで行なっているのは、まさに「伝統的で、非常にフランス的な」« traditionnel, bien français » ネルヴァルをめぐる読解であった。

Je suis tenté de croire qu'il y a une patrie de Racine à jamais inaccessible aux étrangers et qui sait ? peut-être à tous ceux qui sont trop du Midi comme à ceux qui sont trop du Nord. C'est un mystère. C'est ce par quoi Racine exprime ce que nous appellerons le génie de notre race : ordre, raison, sentiment mesuré et force sous la grâce. Les tragédies de Racine supposent une très vieille patrie. [...] je me rappelle un petit livre charmant, très simple, naïf même : Sylvie, d'un rêveur qui fut une espèce de La Fontaine perdu parmi les romantiques. L'histoire se passe dans le pays même de Racine, le Valois. Elle sent à chaque page la vieille France et nullement l'antiquité grecque ou biblique. Et pourtant il me semble qu'on pourrait dire des savantes tragédies de Racine ce que dit Gérard de Nerval des chansons de la terre où Jean Racine est né : « Des jeunes filles dansaient en rond sur la pelouse en chantant de vieux airs transmis par leurs mères, et d'un français si naturellement pur, que l'on se sentait bien exister dans ce vieux pays du Valois où, pendant plus de mille ans, a battu le cœur de la France. »<sup>29)</sup>

イル＝ド＝フランスに実在する街フェルテ＝ミロン Ferté-Milon（ラシーヌの出生地）を意識しながらであろう、ルメートルは、ラシーヌの「故郷」を「フランスの精髓」が溢れ出る創作の源として想い描く<sup>30)</sup>。外国人はおろか、北方のフランス人も南方の人々も触れることができないその場所が、北でも南でも

ない、まさにフランスの「心臓部」＝「中心」（イル＝ド＝フランス）に位置することが示唆されている点に留意しよう。フランスを代表する劇作家の才能と土地との絆を描くその口調は、あきらかに伝統主義的な調子を帯びている。『シルヴィ』を形容する際に用いられる「simple」や「naif」といった語が、ブルーストのネルヴァル観と相容れないことは改めて強調するまでもない。ルメートルにとってのネルヴァルは、ロマン主義者たちを代表する作家などではなく、あくまで彼らのなかに「迷い込んだ」存在であった。くわえて、ネルヴァルにゆかりの土地であるヴァロワ地方をラシーヌと結びつけ、ネルヴァル自身をラ・フォンテーヌに重ね合わせる視点が示すのは、新古典的なスタンスを特徴づける、17世紀フランス文学への深い思い入れにほかならない。ここで『シルヴィ』から引用されるのは、「アドリエンス」と題された章の一節である。だが、実際には半覚醒の状態に落ちた語り手が想起する光景の一部であるにもかかわらず、ルメートルは躊躇うことなくそれを伝統主義的コンテクストのなかに接ぎ木しているのだ<sup>31)</sup>。

このような視点は、ルメートルに限られたわけではない。1913年に『規律ー古典復興の文学的・社会的必要性』と題された、古典復興運動に関する総合的な理論書を出版したアンリ・クルアール Henri Clouard (1889-1974) は、「フランス的な伝統」という章のなかに次のような一節を書きつけている。

[...] l'on estimerait volontiers que les lettres françaises ont toutes seules le droit d'être nationales, comme dépositaires du patrimoine civilisé. Seul un Français peut écrire d'une simple jeune fille d'Île-de-France, sans manquer au naturel, que « son sourire a quelque chose d'athénien » : c'est le sourire de Sylvie.<sup>32)</sup>

直接名指されることはないものの、シルヴィという登場人物を描き切った「フランス人」こそはネルヴァルであり、彼の作品は「国民的な」フランス文学の典型として持ち出されている。ネルヴァル作品の賞賛者でもあったクルアールは<sup>33)</sup>、1920年代後半にネルヴァル関連のエディション（ル・ディヴァン社から出版されたネルヴァル作品集。『幻視者』、『東方紀行』、『火の娘』、『オーレリア』などを収録）をいくつも手がけているが、1924年に出版された『ネルヴァル選集』の序文には、さらに次のような指摘が見て取れる。

[...] il [=Gérard] fut enfin un des propagateurs les plus insinuants et les mieux instruits des lettres allemandes : et malgré tout, Français exquis, témoin de la tradition vivante,

résistant au temps, et qui même déjà rajeunit.<sup>34)</sup>

根ざすことによる安心や保証などからは縁遠く、時間と空間のなかで不安に満ちた彷徨を続けることを運命づけられたネルヴァルの姿は覆い隠され<sup>35)</sup>、フランスの大地と伝統に根づいた人間としてのジェラール像が強調される。そしてネルヴァルは何よりもまず、「洗練されたフランス人」であることを求められたのである。

### Ⅲ. 古典復興運動に抗して

「ネルヴァルの精髓」が、土地の名前や土地そのものに浸透させた「狂気」を感じ取る努力をせず、表面的な観察を繰り返して「人種の精髓」を顕揚する姿勢は、ブルーストにとって断固たる批判の対象だった。これは、「風景が持つ中庸の優美さを素材としながらも、ネルヴァルがその向こう側へと向かっていく」(CSB, 240) ことを理解せず、語られる土地の数々にフランスの精髓との関わりしか見ようとしないうことと根を同じくする問題である。ブルーストは次のように書いている。

L'Île-de-France, pays de mesure, de grâce moyenne, etc., Ah ! que c'est loin de cela, comme ici il y a de l'inexprimable, quelque chose au-delà de la fraîcheur, au-delà du matin, au-delà du beau temps, au-delà de l'évocation du passé même. [...] Aussi pour le suggérer, que fait M. Barrès ? Il nous dit ces noms, il nous parle de choses qui ont l'air traditionnel et dont le sentiment, le fait de s'y plaire est bien d'aujourd'hui, bien peu sage, bien peu « grâce moyenne », bien peu « Île-de-France » selon M. Hallays et M. Boulenger, comme « la divine douceur des cierges vacillants en plein jour dans nos enterrements » et « les cloches dans la brume d'octobre ». Et la meilleure preuve, c'est que quelques pages plus loin on peut lire la même évocation, [mais cette fois par] M. de Vogüé qui, lui, en reste à la Touraine, aux paysages « composés selon notre goût », à « la blonde Loire ». Que cela est à cent lieues de Gérard ! (CSB, 240. 強調引用者)

伝統主義的な立場からくり返されてきた「中庸の国、適度な魅力を持った国」といった表現が、ネルヴァルの描き出した土地からいかにかけ離れたものであるか。このことを示すために書きつけられたこの一文において、ブルーストの批判の鋒先は、シャンティイに居を構えてフランス語の伝統擁護に尽力したマ

ルセル・ブーランジェ Marcel Boulenger (1873-1932) と<sup>36)</sup>, 17世紀文学に傾倒し、フランス各地を逍遙して多くの文章を残した批評家アンドレ・アレー, そしてアカデミー会員でもあるウジェーヌ＝メルキオール・ド・ヴォギュエに向けて<sup>37)</sup>。ネルヴァル断章の軸となっているのは、「非理性」や「描写し得ないもの」、あるいは「無意識」といった要素を読み取ろうとせず、「知性」を優先して平易で単調な読解・描写を繰り返すことに対する批判であった。例えば、平明な筆致で風光明媚なイル＝ド＝フランスの土地を描き出したアレーは「王家の領地であるこの土地においてフランスの魂が形成された」のだということ、そして「ここにおいて国家の芸術が生まれた」ことを確信していた<sup>38)</sup>。ブルーストはこうした傾向に抗うかたちで、ネルヴァルのヴィジョンがとらえたヴァロワ地方の美と、新古典主義的な「節度あるフランスの美」とを峻別するのである (CSB, 237)。『シルヴィ』に描かれるのは「明解で平易な水彩画」*« claires et faciles aquarelles »* でも「節度あるフランスの水彩画的な色調」*« les tons aquarellés de [la] France modérée »* でもない (Ibid.)。そして人々が「素朴な絵画」と呼ぶところのものは、実際には「ある夢についての夢」であり、そこでは平明さという言葉ではかることのできない「とらえ難い印象の数々」が問題になっていることをブルーストは指摘するのである。

時代は下ることになるが、こうした「水彩画」に対するブルーストの抵抗は、『失われた時を求めて』の最終巻に描かれた、文学への決別をめぐるエピソードの一つ (IV, 433-434) に通じているように思われる。主人公は、療養のために滞在していたサナトリウムからパリに戻る汽車のなかで、「フランスでも最も美しいと評判の田園の一つ」 (IV, 433) を目にするのだが、全く創作の意欲が駆り立てられることがなかった。そのことに愕然とした彼は、ゴンクール兄弟の『日記』を再読したときに味わった、自分の文学的才能に対する諦めの感覚を思い起こすのである。しかし、美しい自然を前にしながら何一つ感じ入ることがなかった主人公について語られた次の一節には、そうした諦念の素直な表明とは別の意図が含まれているのではないか。

Si j'avais vraiment une âme d'artiste, quel plaisir n'éprouverais-je pas devant ce rideau d'arbres éclairé par le soleil couchant, devant ces petites fleurs du talus qui se haussent presque jusqu'au marchepied du wagon, dont je pourrais compter les pétales, et dont je me garderais bien de décrire la couleur comme feraient tant de bons lettrés, car peut-on espérer transmettre au lecteur un plaisir qu'on n'a pas ressenti ? (IV, 434)

草稿の一つでは「文学によって描かれたもっとも芸術的なスペクタクル」とも表現された光景が目の前に広がっていることに驚きながら<sup>39)</sup>、主人公はそれを「多くの優れた文人たち」の描くような「色彩」によってなぞり直すことができずにいる。この問題を、ネルヴァル断章における、土地についての思索に照らし合わせて考えてみれば、自らに失望する主人公＝語り手の口調とは裏腹に、作者であるブルーストがそこに本当の意味での文学的な挫折を認めていないことは明らかである。「小川」や「花々」、「苔」などに満ちた、イル＝ド＝フランスを思わせる田園について用いられた表現（あるいは主人公が味わった挫折そのもの）は、既存の平易な「文学的」描写に対する密かな皮肉と読み替えることができる。そして、主人公のこの体験が一連の無意識的記憶の一つとして蘇り、本当の「快楽」をもたらしことを考えれば、「芸術家の魂」は、安易な描写とはべつとところに見出されるという主張の伏線が張られていると推察するべきだろう。木々に対して語りかける主人公の台詞は、小説のもっとも古いエピソードの一つとして、すでにカルネ 1 のなかに書き残されている<sup>40)</sup>。このメモの執筆は1908年夏頃と推測されているが、それがまさにネルヴァルをめぐる思索が深められつつあった時期と一致することは、土地の「印象」を捉える独自のヴィジョンの生成を考える上で、念頭に置いておかねばならない重要な事実である。

そしてネルヴァル断章におけるブルーストの考察は、土地をとらえる「ヴィジョン」の問題から、土地の「印象」について語る際の「文体」の問題にも広がってゆく。もはや議論はネルヴァル論の枠組みに囚われることなく、伝統的フランス語に対する崇拜（その喪失への危機感）という、古典復興運動のもうひとつの重要な側面の意義が問われることになる。断章前半部の冒頭のわずか1ページ弱のテキストのなかに« aujourd'hui »という語が4回も用いられていることから推察できるように、ネルヴァル断章は、この作家をめぐる「今日」<sup>こんにち</sup>、さらには『サント＝ブーヴに反論する』全体を貫いている、文芸批評という主題をめぐる「今日」<sup>こんにち</sup>を強く意識して書かれたものであった。そして、「文体」の問題についての言及もまた、次のように書き始められる。

Aujourd'hui toute une école, qui à vrai dire a été utile, en réaction de la logomachie abstraite régnante a imposé à l'art un nouveau jeu qu'elle croit renouvelé de l'ancien, et où comme on commence par convenir que pour ne pas alourdir la phrase on ne lui fera rien exprimer du tout, que pour rendre le contour du livre plus net on en bannira

l'expression de toute impression difficile à rendre, toute pensée, etc., et pour conserver à la langue son caractère traditionnel on se contentera constamment de phrases qui existent, toutes faites, sans même prendre la peine de les repenser, il n'y a pas un extrême mérite à ce que le tour soit assez rapide, la syntaxe d'assez bon aloi et l'allure assez dégagée. (CSB, 237)

「晦渋に抗して」《Contre l'obscurité》と題された象徴主義批判の記事を『ルヴェ・ブランシュ』誌に発表してから約12年ののち<sup>41)</sup>、ブルーストはフランス語の「明解さ」を声高に称揚する「流派」を弾劾する。すでに指摘されているように、ブルーストがここで言う、「支配的な、抽象的で意味のない言葉の羅列」《la logomachie abstraite régnante》が指し示すのは、象徴主義運動の影響下で生み出された様々な文学的所産にほかならない<sup>42)</sup>。ここで語られているのは、古典回帰の流れが示した、象徴主義への反発であり、ブルーストがこうした状況を明確に認識していたことが理解できる。ブルーストはこのような反動が「有効であった」ことを認めながらも、新古典主義的な文体の特質に対しては否定的な見解を示し、常套句に対する好み、フランス語の伝統的性格に対するこだわり、平易な（安直な）統辞法の多用といった点を列挙しながらきびしく批判するのである<sup>43)</sup>。また、フランス語の文法や文体をめぐる当時の議論に作家が無関心でなかったという事実は、当時の書簡にもあらわれている。1908年11月初旬にストロース夫人 Mme Emile Straus, née Geneviève Halévy (1849-1926) に宛てた手紙のなかで、「フィガロ」紙に掲載されたルイ・ガンドラックス Louis Ganderax (1855-1940) の記事（『ジョルジュ・ビゼー書簡集』に寄せた序文全文<sup>44)</sup>）に言及したブルーストは、ガンドラックスが示した「フランス語の擁護と顕揚」の姿勢を批判して、次のように書く。

Pour l'illustration, non. Pour la défense non plus. Les seules personnes qui défendent la langue française (comme l'Armée pendant l'affaire Dreyfus) ce sont celles qui « l'attaquent ». [...] Chaque écrivain est obligé de se faire sa langue, comme chaque violoniste est obligé de se faire son « son ». [...] Et quand on veut défendre la langue française, en réalité on écrit tout le contraire du français classique.<sup>45)</sup>

「顕揚」や「擁護」という積極的な態度表明自体が、フランス語の変容に対して伝統主義者が感じた不安の裏返しでしかないことを見透かしたかのように、ブルーストはガンドラックスの姿勢を真っ向から否定する。17世紀古典主義文

学にも造詣が深いはずのブルーストが拒絶するのは、フランス語のもつ古典的な価値そのものではなく、文学的な営みを古典作品の表面的な模倣や「無意識のパステイッシュ」に貶めかねない古典復興運動の教義であった<sup>46)</sup>。古典的規範の不毛な繰り返しに陥るのではなく、それを「攻撃する」ことで初めて、新たな「古典」の名にふさわしい独創性を築くことができる<sup>47)</sup>。ブルーストが打ち出すこの命題は、最晩年に至っても決して揺らぐことはない。

多少の脱線を恐れずに付け加えるならば、ネルヴァル断章の読解を通じて浮かび上がるこのような視点は、ブルーストがジャン・モレアス Jean Moréas (1856-1910) という詩人に対して否定的な態度を取り続けたという事実によっても裏付けられる。「象徴主義宣言」(1886)の人としてではなく、古代ギリシャ・ローマと古典主義を範とするロマネ派の創設者としてのモレアスは、古典復興運動の重要人物と位置づけられていた。アンリ・クルアールは、先に取り上げた著作『規律』のなかの「古典主義の歩み」と題された章で、モレアスに11ページを割き、『スタンス集』(1899, 1901)を著わした詩人の「歩み」を賞讃している<sup>48)</sup>。ブルーストは、自ら「モレアス」と題した断章を残しているが<sup>49)</sup>、ネルヴァル断章と同様『サント＝ブーヴに反論する』に収められたこのテキストで作家が批判したのは、モレアスの擬古主義的態度であった。

L'archaïsme est fait de beaucoup d'insincérités, dont l'une est de prendre pour des traits assimilables du génie des anciens des traits extérieurs, évocateur dans un pastiche, mais dont ces anciens eux-mêmes n'avaient pas conscience, car leur style ne rendait pas alors de son ancien. [...] Il [= Jean Moréas] se rattache à l'école (Boulenger ?) — et Barrès — en ce qu'il indique d'un mot, l'école du sous-entendu. C'est juste l'opposé de Romain Rolland. Mais ce n'est qu'une qualité, et cela ne prévaut pas contre le néant du fond et l'absence d'originalité. (CSB, 310-311. 強調引用者)

表面的な模倣に終始することの「不誠実さ」を批判するブルーストは、モレアスの作品のうちに「内容の価値の無さと独創性の欠如」しか認めない。ロマネ派の活動を象徴する詩集である『スタンス集』も、ブルーストにとっては、「凡庸さ」と「活力の欠如」を伝えるだけのものだったのである。

このテキストがブルーストの生前に発表されることはなかったが、モレアスが示す古典回帰の問題は、戦後のブルーストの言説にもあらわれる。1920年3月から4月にかけて、この詩人の死後10年を記念して書かれた数々の記事<sup>50)</sup>に触発されたブルーストは、当時の書簡のなかでたびたびモレアスについて言及



している<sup>51)</sup>。同年6月下旬、ジャン・ド・ピエールフウ Jean de Pierrefeu (1883-1940) に宛てた手紙もその一つであり、ブルーストのモレアスに対する評価は、ここでもまた否定的であった。

Mais pour le premier [=le talent de Moréas], j'avoue que je ne comprends pas comment on peut s'appuyer sur la « tradition » ; tout art qui chemine à l'aide de ces béquilles n'est qu'un jeu qui peut être agréable mais n'a rien de réel. L'*Olympia* de Manet continue mieux Ingres que les imitateurs de celui-ci, Victor Hugo mieux Racine que Campistron etc. (Corr. XIX, 317 : à Jean de Pierrefeu [le 22 juin 1920])

一読して理解されるように、ネルヴァル断章の冒頭に示された古典理解をめぐる視点は、依然として有効である（ネルヴァル断章においても、やはりラシーヌとカンピストロンが例として挙げられていたことも想起しよう）。そして作家は、1921年6月の『新フランス評論』に掲載された「ボードレールについて」  
« A propos de Baudelaire » の末尾でもこの論理を繰り返している。

[...] on dit aujourd'hui d'écrivains qui n'emploient que le vocabulaire de Voltaire : « Il écrit aussi bien que Voltaire. » Non, pour écrire aussi bien que Voltaire, il faudrait commencer par écrire autrement que lui. Un peu de ce malentendu règne dans la renaissance qui s'est faite autour du nom de Moréas. (CSB, 639. 強調引用者)

詩人の名と結びついた文学状況を指して「復興」« renaissance » という語を用いていることからわかるように、ブルーストはモレアスを一つの中心とした古典の「復興」の意義を疑問視していた<sup>52)</sup>。この懐古主義的な詩人をめぐる議論によって浮かび上がるのは、「古典」あるいは「古典主義」の定義や、芸術の進歩・刷新の問題についてのブルースト的な見解の特質であり、古典復興の流れに対する反発が作家の小説美学に及ぼした影響の大きさである<sup>53)</sup>。そして、世紀転換期における象徴主義関連の議論から、戦後の近代的文学思潮の問題に至るまで、古典復興の流れとブルーストの文学的成長の歩みとが直接的・間接的に関わりつづけたことも理解できるはずだ。ネルヴァル断章の思索は、このような広い射程のもとに捉えることで、初めて十全に理解することができるのではないだろうか。

古典復興運動は、『サント＝ブーヴに反論する』執筆の背景として無視できないトポスのひとつであった。ブルーストの批評意識の形成には、この流れに対する抵抗感が少なからず関わっていたといえる。そのことが明確に表れていたのが、ネルヴァル断章における「古典復興」的なネルヴァル読解への批判であった。

こうした批判は、結果として、ネルヴァルにおける夢や夢想、狂気的重要性を強調する契機の一つともなっている。「中庸の優雅さのモデル」と考えられた土地は、実際には「病的な強迫観念」と結びついており、描かれた土地の光景が帯びる「単純さ」の背後には、「心の動揺」« trouble » が浸透している。そこに浮かび上がるのは、フランスの大地に根ざした「純粋なガリア人」« pur Gaulois » ではなく、起源への憧憬を胸に、絶えず彷徨い続けるネルヴァル像であるはずだ。

そしてさらに付け加えるならば、土地が象徴する過去の記憶＝歴史に対して注がれた古典復興的な視線への違和感もまた、ネルヴァル断章の思索が深まる契機ともなったはずだ。そこには、来るべきコンブレーの創造へと続く、エクリチュール小説の創造と土地、そして記憶の関わりをめぐる思索の一端を見て取ることができる。すでに確認したように、古典復興運動ないしは伝統主義的な視点が捉える土地は、歴史という名の「過去」が層を成して形成されたものとして捉えられていた。アンドレ・アレーがイル＝ド＝フランスのサンリスについて記した一節に例をとろう。

Senlis a conservé les ruines de son château royal. C'est un lieu abondant en souvenirs, puisque, des Carlovingiens à Henri IV, un grand nombre de rois de France y vinrent habiter.<sup>54)</sup>

この土地に満ちた「思い出」は、フランス王家にまつわる記憶以外の何ものでもなく、アレーはそのことを既知の事実として語っている。いっぽうネルヴァルは、フランス王朝史と不可分なイル＝ド＝フランスのヴァロワ地方を取り上げながらも、自らが生まれ育った土地固有の傳承や地方史に対するこだわりを国史に優先させているように思われる。ブルーストが指摘したように、ネルヴァルにとっての土地は、「少なくとも地図上と同じほどに心の中にもはっきりと存在する過去」(CSB, 238) でもあって、その「過去」自体はフランスの伝統とは無縁な、私的な性格の強いものであった。幼年時代を過ごした土地が

き立てる「過去」について物語るネルヴァルの『シルヴィ』が「ヴァロワの思い出」*« Souvenirs du Valois »* という副題を冠していることを思えば、*« souvenirs »* という語が歴史的な意味合いのなかで用いられるアレーのテキストとの違いが歴然としている。土地が喚起する「過去」という主題に関心を抱きながらも、アレーが語る「過去」は公の記憶としての歴史であり、ブルーストがネルヴァルとともに考察を深めてゆく、個人の記憶（私的な思い出）とは異なるベクトルのもとにあった<sup>55)</sup>。記憶と場所とをめぐって、ブルーストが素描したこのような対立構図の背景にもまた、同時代の潮流に対する反動が影を落としていたことも強調されてよいだろう。

ネルヴァル断章に書き留められたブルーストの思考の数々は、このさき、『失われた時を求めて』の執筆に向けて、さらにその重要性を増してゆくだろう。そして、同時代の古典復興的なネルヴァル受容への反発によって深められたブルーストのネルヴァル観は、「ジェラルムよりも遠くへ」進もうとしていたブルーストにとって、自らの小説創造を追求してゆく上で、絶えず重要な指標であり続けることになるのである。

## 注

- 1) 本論考は、2004年9月25日、吉田城先生が主催して開かれたフォーラム「*La Critique au début du XX<sup>e</sup> siècle*」(COE第35-2研究班「異文化交流とフランスの作家・芸術家」[研究代表者・吉田城]第三回国際フォーラム 於：京都大学文学研究科)でのフランス語口頭発表に基づいている。同発表の内容は、2005年4月に京都大学に提出された博士論文『ブルーストとその時代 — 芸術作品と土地をめぐる研究』に収録するにあたって、大幅な加筆訂正が行なわれた。また同論文提出後の2005年10月29日には、大手前大学で開催された関西ネルヴァル研究会にて発表する機会を得た。
- 2) ブルーストとネルヴァルに関しては、例えば以下のような研究が挙げられる。Michel Bernard, « Sylvie ou le pourpre proustien », *Bulletin Marcel Proust*, n° 46, 1996, p. 72-108 ; Kuo-Yung Hong, *Proust et Nerval : études sur l'Univers imaginaire et poétique du récit*, thèse de doctorat, Université de Paris IV, 2003 ; Margaret Mein, « Nerval : a Precursor of Proust », *Romantic Review*, n° 67, 1971, p. 99-112 ; Marie Miguet, « De la lecture de Sylvie à l'écriture de la Recherche », *Bulletin Marcel Proust*, n° 34, 1984, p. 199-215 ; Pierre-Louis Rey, « Proust lecteur de Nerval », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 30, 1998, p. 19-27 ; Anne Simon, « De Sylvie à la Recherche : Proust et l'inspiration nervalienne », *Romantisme*, n° 95, 1997, p. 39-49 ; Jo Yoshida, « La quête de la Mère chez Nerval, Proust et Akutagawa », *Nerval ailleurs* [Jean-Nicolas Illouz et Claude Mouchard éd.], Laurence Teper, 2004, p. 247-268 ; 井上究一郎, 「ブルーストのヴィジョンを開花させたネルヴァル」, 『井上究一郎文集Ⅱ (ブルースト篇)』, 筑摩書房, 1999年, p. 5-31 ; 和田章男, 「ブルーストとネルヴァル批評」, 関西ブルースト研究会 (口頭発表), 2006年3月24日, 京都大学。

- 3) 『失われた時を求めて』の引用は、ジャン＝イヴ・タディエ責任編集の新ブレイヤッド版 (*A la Recherche du temps perdu*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., 1987-1989) に依った。出典表示は、巻数とページ数のみを並記する。
- 4) I, 446 ; IV, 498.
- 5) *Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1971 (以下, CSBと表記), p. 233-242 (« [Gérard de Nerval] ») .
- 6) 『現代文学』というタイトルで1905年にまとめられた文学アンケート集の序文に次のような指摘がある。Georges Le Cardonnell, Charles Vellay, *La Littérature contemporaine (1905): opinions des écrivains de ce temps*, Mercure de France, 1905, p. 5 : « Le monde littéraire est si varié et si mouvante qu'il semble presque inutile de justifier et d'expliquer les enquêtes qu'on y peut faire. [...] Cependant il y a, dans la littérature présente, des tendances qu'il importe de dégager. Tendances confuses, contradictoires, incertaines sans doute. Mais c'est précisément pourquoi il convient de les rechercher avec plus de patience et de les définir avec plus de clarté. »  
 なお、著者の一人であるル・カルドネルは、1920年1月にブルーストの諸作品を高く評価する記事を著わしており (*Minerve française*, vol. 4, 15 janvier 1920, pp. 219-223), それを読んだブルーストは、同月、この批評家に宛てて感謝の手紙を送っている。Voir *Correspondance de Marcel Proust*, [texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb] (以下, *Corr.*と表記), XIX, 72-73 ; à Georges le Cardonnell [peu après le 15 janvier 1920].
- 7) Michel Décaudin, *La Crise des valeurs symbolistes : vingt ans de poésie française 1895-1914*, Slatkine, 1981.
- 8) William Marx, *Naissance de la critique moderne. La littérature selon Eliot et Valéry. 1889-1945*, Artois Presses Université, 2002.
- 9) M. Décaudin, *op. cit.*, p. 128.
- 10) 南仏地方を例にとるまでもなく、各地での出版物の増加とともに、文学における「地方主義」« provincialisme » もまた、大きな飛躍を遂げることになる。この点に関しては、とりわけデコーダンの著作の次の箇所を参照のこと。Michel Décaudin, *op. cit.*, p. 128-140. ちなみに、デカダンス文学や象徴主義文学に対して地方主義が示した反発は、文学的古典復興の流れにも通じていることを確認しておく。
- 11) Gaston Sauvebois, *L'Equivoque du classicisme*, L'Édition libre, 1911, p. 19.
- 12) ガストン・ソヴボワは、古典主義に訴えることの有用性が、文学の美点を回復することにあると指摘した上で、その美点を次のように列挙している。「La clarté, l'harmonie, la mesure, le naturel, le goût qui reparaitront dans la forme des ouvrages seront dus, pour leur emploi, à l'actuelle proposition de la Renaissance classique. » (G. Sauvebois, *op. cit.*, p. 45). この著作の冒頭を飾る、「古典復興の問題は、こんにち、文学のもっとも重要な関心事である」« Il y a aujourd'hui, au premier plan de la littérature, une question de Renaissance classique. »という一節が、件の文学的動向の高まりを端的に証言していることも、あわせて確認しておこう。著者はこれにつづけて、古典復興がもはや歴史の一事項となっていると述べて、「未来のブリュヌチエール、ランソン、ファゲたち」は、好むと好まざるとに関わらず、この時代の研究をするうえで古典復興には言及せざるを得ないはずだと勢い込んでいるが (*Ibid.*, p. 1), すでに確認したように、この思惑は見事に外れることになる。
- 13) 批評家アンドレ・テリーヴ André Thérive (1891-1967) は1925年11月13日に行った公演のなかでこの点に言及し、古典復興運動が批評的な性格の強い運動であること

- を暗に認めている。しかしテリーヴは、古典復興を支持した批評家ピエール・ジルベール Pierre Gilbert (1884-1918) の論集『標柱の森』*La Forêt des Cippes : essais de critique*, Champion, 1918 や、のちに取り上げるアンリ・クルアールの理論的著作などが、単なる批評的実践以上のもの（文学創造に匹敵するもの）であるとも主張している。André Thérive, *Le Mouvement de renaissance classique*, Cercle de la librairie, [1925?], p. 9-10.
- 14) W. Marx, *op. cit.*, p. 79-82. « Pour les partisans de [la renaissance classique], Mallarmé représente par excellence le poète à abattre, l'incarnation maudite du byzantinisme et de la décadence symboliste. » (p. 79) またここでは、文学的・美学的なスタンスだけではなく、マラルメのドレフュス主義支持の姿勢も、古典復興支持者の反感をおこした可能性が指摘されている。
  - 15) Pierre Lasserre, *Le Romantisme français. Essai sur la révolution dans les sentiments et dans les idées au XIX<sup>e</sup> siècle*, Garnier frères, 1907. この著作が巻き起こした論争については M. Décaudin, *op. cit.*, p. 310-330 を参照のこと。
  - 16) W. Marx, *op. cit.*, p. 77.
  - 17) 1907年から1908年にかけての冬にソシエテ・デ・コンフェランスにおいて10回にわたって行なわれた講演原稿をまとめた著作。Jules Lemaitre, *Jean Racine*, Calmann-Lévy, 1908.
  - 18) Maurice Barrès, *Discours prononcés dans la séance publique tenue par l'Académie française pour la réception de M. Maurice Barrès*, Institut de France, 1907. 本書に掲載されているパレスとド・ヴォギュエの演説原稿は、アカデミー・フランセーズの公式ウェブサイトでも読むことができる（最終閲覧日：2006年3月31日）。  
[http://www.academie-francaise.fr/immortels/discours\\_reception/barres.html](http://www.academie-francaise.fr/immortels/discours_reception/barres.html)（パレス）  
[http://www.academie-francaise.fr/immortels/discours\\_reception/vogue.html](http://www.academie-francaise.fr/immortels/discours_reception/vogue.html)（ド・ヴォギュエ）
  - 19) *CSB*, n. 2, p. 233. 同注で指摘されるように、ブルーストはこの表現を草稿の一つ (N. a. fr. 16636) にメモしている。サント＝ブーヴからの引用については、それぞれの箇所を参照のこと。Charles-Augustin Sainte-Beuve, *Nouveaux Lundis*, t. IV, Calmann Lévy, 1885, p. 454 ; *Causeries du lundi*, t. XIV, Garnier frères, [sans date], p. 82.
  - 20) *CSB*, 190. この序文は、翻訳の出版（1906年）に先立って、1905年6月15日付けの『ラテン復興』誌に発表された（その際のタイトルは「読書について」）。
  - 21) ブルーストはのちに、現代の女性をモチーフとした画家エドガー・ドガ Edgar Degas (1834-1917) の古典理解に関しても同様の指摘をおこなう。*Corr.* XII, 390 : à Gabriel Astruc [seconde quinzaine de décembre 1913] : « Je veux dire que ce qui est vraiment antique, ce qui est l'équivalent dans l'art moderne du jeune héros arrachant l'épine, ce n'est pas tel tableau académique qui signe l'antique mais une femme moderne de Degas qui s'arrache un ongle ou une peau de pied. » ドガの描く踊り子とヘレニズム期のブロンズ像『刺を抜く人』との重ね合わせは、『花咲く乙女たちの陰に』にも描かれることになる (II, 302)。この点については、拙論、『失われた時を求めて』における視覚的調和 — モネの「睡蓮」とドガの「踊り子」をめぐって —, 『仏文研究』, 第30号, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 1999年, p. 134-135 も参照のこと。
  - 22) Camille Maclair, « Notes sur la technique et le symbolisme de M. Rodin »,

*Renaissance latine*, 15 mai 1905, p. 200-220.

- 23) これに対して、当時の英語圏の批評家たちは、フランスに先んじるかたちで、ネルヴァル作品の本質に近づいていたようにも思われる。ネルヴァルを「狂えるロマン派詩人」とよんだラファディオ・ハーンや、象徴主義の先駆的存在として位置づけようとしたアーサー・シモンズなどがその例であり、どちらの論考も1880年代に発表されている。Lafcadio Hearn, « A Mad Romantic » [1884], *Essays in European and Oriental Literature*, Dodd, Mead and Company, 1923, p. 43-54 ; Arthur Symons, « Gérard de Nerval » [1880], *The Symbolist Movement in Literature*, Constable, 1908, p. 10-36.
- 24) Eugène Monfort, « Un Romantique que nous pouvons aimer. Gérard de Nerval », *Les Marges. 1903-1908*, Bibliothèques des marges, 1913, p. 8-16. 創刊以来、1908年4月までに出版された『レ・マルジュ』計8号は、すべてモンフォール一人によって書かれるという極めて変則的なスタイルをとっていた。これらは1913年に一冊の書物にまとめられている。
- 25) *Ibid.*, p. 12 : « Vivant au milieu des Romantiques, très mêlé à leur mouvement [...], Gérard de Nerval a su ne pas subir leur influence et conserver une originalité d'autant plus difficile à garder qu'elle s'éloignait de l'originalité du jour. Gautier l'a dit tout à l'heure : Nerval était parmi eux le seul *lettré*, et il restait plus français qu'aucun d'eux... » モンフォールが言及しているゴーチエの一節は次の通りである。ここに語られるネルヴァル像も、ブルーストの批判の対象となったイメージに通じる要素を含んでいる。「Gérard était parmi nous le seul *lettré* dans l'acception où se prenait ce mot au XVIII<sup>e</sup> siècle. Il était plus subjectif qu'objectif, s'occupait plus de l'idée que de l'image, comprenait la nature un peu à la façon de Jean-Jacques Rousseau, dans ses rapports avec l'homme ; n'avait qu'un goût médiocre aux tableaux et aux statues, et malgré son commerce assidu avec l'Allemagne et sa familiarité avec Goethe, restait beaucoup plus Français qu'aucun de nous : de race, de tempérament et d'esprit. » (*Ibid.*, p. 11) モンフォールはこの引用のレフェランスを明記していないが、ゴーチエの『ロマン主義の歴史』からの一節である。Voir Théophile Gautier, *Histoire du romantisme*, dans *Œuvres complètes*, t. XI, Slatkine Reprints, 1978, p. 18.
- 26) E. Monfort, *op. cit.*, p. 226 [« Deux mots d'explication » (avril 1907) ]. « Au mouvement romantique, on oppose Gérard de Nerval, qui sut, pendant l'époque romantique, demeurer classique. » (cité dans M. Décaudin, *op. cit.*, p. 222)
- 27) Maurice Barrès, « Gérard de Nerval ou le peintre du Valois », *L'Auto*, 28 septembre 1906.
- 28) Gérard de Nerval, *Sylvie* [préfacé par Ludovic Halévy ; 42 compositions dessinées et gravées à l'eau-forte par Ed. Rudaux], L. Conquet, 1886. 井上究一郎は、ブルーストのリセ・コンドルセ時代の学友ダニエル・アレヴィの父リユドヴィクがこの書物に序文を付していることに着目し、件のエディションが青少年時代のマルセルに『シルヴィ』を印象づけた可能性を指摘している(井上究一郎, 前掲書, p. 15)。なお、1895年にはアメリカで英訳が出版され、1981年にはその復刻版 [*Sylvie : recollections of Vallois*, AMS Press, 1981 (reprint of New York : Home Book Co., 1895)] も刊行されている。

ちなみに、ネルヴァルが描き出した世界に対するこのような視線は、戦後も失われることはなかった。1923年7月23日付けの号でネルヴァル特集を組んだ『ルヴェ・フランセーズ』誌は、その記事の一つで、『シルヴィ』の美しい田園生活が、

役者たちによって実際にヴァロワ地方で再現された模様を次のように伝えている。  
 « L'autre dimanche, une fête délicate et campagnarde, rurale et parisienne, aristocratique et populaire, littéraire et naïve, s'est déroulée aux environs de Senlis, dans la plus charmante partie du Valois plein du charme, en l'honneur et pour l'amour d'un écrivain exquis à qui mainte réparation est due. [...] le 9 juillet, on a célébré là Gérard de Nerval, en déroulant de village en village quelques épisodes de sa charmante Sylvie, représenté par deux acteurs de la Porte-Saint-Martin, Mlle Maguenat et M. René Béchét. » (René Brécy, « A la gloire de Gérard de Nerval », *La Revue française*, 23 juillet 1923, p. 94.)

- 29) J. Lemaitre, *Jean Racine*, Calmann-Lévy, 1908, p. 323-324. 強調引用者。
- 30) 伝統主義的な立場から多くの批評を著わすとともに、フランス各地を逍遙しながらその豊かさと美を讀める記事を發表していたアンドレ・アレー André Hallays (1859-1930) もこの街について記事を残している。アレーはラ・フォンテーヌの故郷について語ったテーヌの文章を引用し、「中庸」や「穏やかさ」をラ・フォンテーヌの土地に見出すテーヌの姿勢に強く共感している。「Je songe aux pages que Taine a placées en tête de son étude sur la Fontaine, et où il découvre dans le paysage français les qualités mêmes de l'esprit gaulois. [...] Les montagnes étaient devenues collines ; les bois n'étaient plus guère que des bosquets... De minces rivières serpentaient entre des bouquets d'aunes avec de gracieux sourires... Tout est moyen ici, tempéré, plutôt tourné vers la délicatesse que vers la force. » Comme tout cela est juste ! le rapport est parfait entre le génie de la Fontaine et l'aspect de son pays natal. » (André Hallays, « La Ferté-Milon », *En flânant. Autour de Paris*, t.1, Perrin, 1910, p. 23) 今日でこそ殆ど顧みられないものの、アレーは當時を代表する批評家の一人であり、その著作の数々は、「全ての文人に知られている」(Maurice Barrès, « André Hallays », *L'Echo de Paris*, 15 février 1911) といわれるほどに広く認知され、1900年代初頭から多くの読者を獲得していた。『ジュルナル・デ・デバ』紙を定期購読していたブルーストは、批評家が同紙に連載していた「そぞろ歩き」« En flânant » (第一回は1898年11月4日。以後、ほぼ週一回のペースで掲載される) に日常的に目を通していた。生涯を通してフランスの大地の美と伝統を称揚し、史的建造物保護を訴え続けた彼の言説は、ブルーストの美学的なヴィジョンの展開を知る上で、興味深い比較対照ともなる(拙論、『ブルーストとその時代 — 芸術作品と土地をめぐる研究』, 第2部第1章「ブルーストとアンドレ・アレー」)。
- 31) プレイヤード版の解説にもあるように、『シルヴィ』という作品は、他ならぬアドリエンスという登場人物の存在によって、単なる田園小説の枠組みを超えている(Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome III, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, p. 1214-1215 [« Notice de *Sylvie* » par Jacques Bony]). 語り手が惹き付けられるこの少女は、古のフランス王家の血をひくことで「土地」に結ばれた娘である以上に、「半ば夢のような思い出」のなかに登場し、風貌も曖昧なままに消え去ってゆく存在である。ブルーストは彼女が登場する章の重要性を感じ取り、そのなかの一節を単なる伝統賛美と解釈することに反発を覚えたのであろう。
- 32) Henri Clouard, *Les Disciplines. Nécessité littéraire et sociale d'une renaissance classique*, M. Rivière, 1913, p. 99. 強調引用者。
- 33) クラメールは『規律』のなかで、ロマン主義や自然主義をはじめとした19世紀の文学的な試みの大半が失敗に終わったことを指摘するいっぽう、スタンダール、フロマンタンとともにネルヴァルの作品が例外的な成功だったと語っている (*Ibid.*, p.

- 127-128)。なおクルールは、ネルヴァルについてのモノグラフィー（H. Clouard, *La Destinée tragique de Gérard de Nerval*, Bernard Grasset, 1929）も出版している。
- 34) Gérard de Nerval, *Œuvres choisies* [édition établie par Henri Clouard], Garnier frères, 1924, p. v [préface de Clouard]. 強調引用者。
- 35) たとえばポール・ヴァレリー Paul Valéry (1871-1945) は、ネルヴァルについて書き残した数少ないテキストである「ネルヴァルの思い出」(1944年)のなかで、ロマン主義詩人のうちに「不安のしみ込んだ知性」« intelligence pénétrée d'inquiétudes » や「不確かさの領域」« un domaine d'incertitude » を認めている。Paul Valéry, « souvenir de Nerval », *Œuvres*, t. 1, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1957, p. 590-597.
- 36) マルセル・ブーランジェは1904年に『シルヴィの土地にて』という著作を発表している (Marcel Boulenger, *Au pays de Sylvie*, P. Ollendorff, 1904.)。しかし、この短編集で取り上げられるのはネルヴァルの『シルヴィ』ではなく、17世紀のフランス詩人テオフィル・ド・ヴィオー Théophile de Viau (1590-1626) とその作品であり (詩人は1623年に「シルヴィの家」« Maison de Sylvie » というタイトルの詩を残している), 「シルヴィの土地」はシャンティイを指していることを指摘しておく。1908年には、詩人が晩年に隠遁したシャンティイの城館が、「シルヴィの家」として1908年に復興され、話題となっている。マルセルの弟にあたるジャック・ブーランジェ Jacques Boulenger (1879-1944) は『ネルヴァルの土地にて』*Au pays de Gérard de Nerval*, Honoré Champion, 1914を著わしているが、吉川一義氏も確認しているように、ブルーストと彼との交際が親しくなるのは、1919年以降のことである (『ジェラルド・ド・ネルヴァル』, 出口裕弘, 吉川一義訳, 『ブルースト全集14』, 筑摩書房, 1986年, 註42)。参考までに、ジャックに関しては、アンドレ・テリーヴが、既述した古典復興についての講演のなかで、「当を得た古典主義の化身そのもの」と語り、その批評活動を高く評価していることを指摘しておく。A. Thérive, *op. cit.*, p. 13.
- 37) ここに引用した一節は、これまで考えられてきたほどに反バレス的ではないように思われ。イル＝ド＝フランス地方の土地の「名前を引用し、一見伝統的な装いをした事柄について語る」バレスは、少なくとも「風景の節度ある魅力」の向こうにある何かを感じ取り、(恐らくはそこに到達できないながらも)「狂気」によって捉えられたその何かに近付こうと努めている。ブルーストはこのように考えて、バレスに対して一定の評価をしているのではないか。解釈の要となるのは « et dont le sentiment... » 以下 « ...et M. Boulenger » までの文である。この箇所は、バレスがネルヴァルの土地を喚起するために行なっていることを否定的に修飾するものではなく、むしろ、ぎこちなく挿入されたブルースト自身の意見表明と解釈すべきだろう。バレスがヴァロワをめぐって演説のなかで行なっていることを、他の伝統主義者との比較において再評価する好意的な分析を試みている箇所と考えた方が前後との繋がりも明確になるように思われる。
- 38) A. Hallays, *En flânant. Autour de Paris*, t. I, Perrin, 1910, p. 116 : « Il n'est point de hameau de l'Ile-de-France qui ne possède une église précieuse et exquise. C'est ici, sur la terre du domaine royal, qui s'est formée l'âme de la France. C'est ici qu'est né son art national. » また、批評家の17世紀文学への傾倒については、ポール・ロワイヤルやセヴィニエ夫人、シャルル・ペローなどに関する著作のみならず、1905年のド・ヴォギュエの発言が端的に証明している。同時代の文学動向についてのアンケ



ートのなかで、古典復興という動向の有無について問われたド・ヴォギュエは、次のように答えている。「Une renaissance classique ? Nû Je [= E.-M. de Vogüé] vois bien une renaissance du XVIII<sup>e</sup> siècle, avec des maîtres comme M. Anatole France et ses imitateurs : je doute que l'on remonte plus haut, au XVII<sup>e</sup> siècle ; en dehors de quelques isolés, peu coutumiers des œuvres d'imagination pure, tels que M. André Hallays, M. Charles Maurras... » (Georges Le Cardonnell, Charles Vellay, *La Littérature contemporaine (1905): opinions des écrivains de ce temps*, Mercure de France, 1905, p. 205. 強調引用者) 17世紀の復興に寄与する数少ない人物の一人としてアレーを挙げていること、そしてアレーの名がシャルル・モーラスと肩を並べているという事実が、この批評家の活動の重要性を物語っている。

ブルーストはアレーの新古典主義的価値観を見落としてはしなかった。そのアレーが、「ラシーヌ巡礼」と題された記事で、ルメートルがラシーヌについておこなった講演を絶賛しているという事実は極めて示唆的である。「M. Jules Lemaitre a fait un discours et a dit sur Port-Royal, sur le jansénisme de Phèdre, sur la bonté et la tendresse de Racine des paroles d'une beauté incomparable. [...] Les phrases ondulaient comme les coteaux. La souple pensée du critique s'était mise au rythme même du génie de Racine. Ce furent là d'exquises minutes. Lisez et relisez le discours. C'est une des plus belles pages, peut-être la plus belle, qu'un écrivain français ait jamais écrite à la gloire de Racine. » (A. Hallays, « Pèlerinages raciniens », *En flânant*, Société d'édition artistique, [1899 ?], p. 323) また、この論考の中で「もし注文をつける点があるとするならば」という留保のもとにアレーが不満を漏らしたのは、ルメートルがサント＝ブーヴの功績に言及しなかった点であった（これを受けてか、1908年の『ジャン・ラシーヌ』では、サント＝ブーヴへの言及がなされている）。この事実は『サント＝ブーヴに反論する』を取り上げるうえで興味深い。というのも、ブルーストが問題にするアレー、ルメートル、サント＝ブーヴがここで結びつくことになるからである。ただし、アレーやルメートルに注がれたブルーストの批判的な視線は、より大きな潮流である古典回帰への欲求を捉えていたことを忘れてはならない。

- 39) IV, 801 [Esquisse XXIV.1 : Cahier 58 (N. a. fr. 16698)] : « [...] dans le ruisseau qui un moment logeait la voie, je voyais une telle variété de fleurs, de mousses mêlées à de beaux reflets du ciel qu'on avait l'étonnement de voir que les plus artistiques spectacles décrits par la littérature se trouvent en effet dans la réalité, sur une voie de chemin de fer. »
- 40) Carnet 1 (N. a. fr. 16637), ff<sup>o</sup> 4 v<sup>o</sup> - 5 r<sup>o</sup> : Marcel Proust, *Carnets* [édités par Florence Callu et Antoine Compagnon], Gallimard, 2002, p. 38.
- 41) *La Revue blanche* du 15 juillet 1896, p. 69-72 (CSB, 390-395) .
- 42) 「ジェラルド・ド・ネルヴァル」, 出口裕弘, 吉川一義訳, 『ブルースト全集14』, 筑摩書房, 1986年, p. 291, 注21. また, 「晦渋に抗して」のなかで表明されたブルーストのフランス語観については, 次の文献も参照のこと. Sylvie Pierron, *Ce beau français un peu individuel. Proust et la langue*, Presses universitaires de Vincennes, 2005.
- 43) 一見すると, ブルーストの主張は, 「晦渋性」の批判から「平明さ」の批判へと180度方向転換したようにも思える。だがこれを, 作家の思想の根本的な変化と解釈するのは早計であろう。デコーダンが確認しているように, 古典復興の旗手の一人であったガストン・ピカル Gaston Picard (1892-1962) は, 1911年3月, *L'Heure*

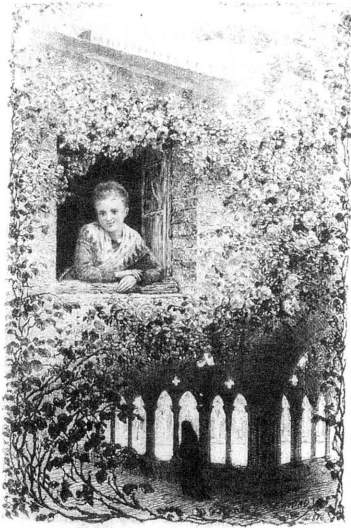
*qui sonne*という文芸誌に掲載された記事で、若い世代の文学の2つの傾向として「象徴主義の継続」と「古典主義への回帰」を挙げている (M. Décaudin, *op. cit.*, p. 327)。ポール・ヴァレリーが象徴主義と新古典主義との統合を実現することによって「古典的象徴主義」の道を切り開いたとするならば (W. Marx, *op. cit.*, p. 86-87)、ブルーストは、二つの同時代的な文学潮流の極端な現れ (clarté/obscurité) のどちらからも距離をとることによって独創性を模索したといえることができるのではないだろうか。ブルーストの象徴主義批判がマラルメに続く世代、すなわち「若い詩人たち」« la jeunesse flagornée »を標的としていることも、そうした距離感を裏付けるはずだ (CSB, 390-395 ; 395-396)。

- 44) Louis Ganderax, « Lettres de Georges Bizet », *Le Figaro*, 3 novembre 1908 ; *Lettres de Georges Bizet. Impressions de Rome* (1857-1860) ; *La Commune* (1871) [préf. Louis Ganderax], Calmann-Lévy, 1908.
- 45) *Corr.* VIII, 276-277 : à Madame Straus [le 6 novembre 1908].
- 46) ブルーストは「文法的な教義」に捕われたガンドラックスを批判して、次のように指摘している。「Oui, cet homme si intelligent a connu toute votre vie. Il a déjà fait un peu du chemin de toute vie, il se tourne en arrière, la diversité des plans devrait multiplier pour lui la beauté des éclairages. Mais le dogme grammatical le tient dans ses chaînes. » (*Corr.* VIII, 278)
- 47) 先に触れたモークレールのロダン論に引用された彫刻家の言葉のなかには、古代ギリシャ彫刻の表面的な模倣についての示唆的な指摘がある。「Je n'imité pas les Grecs. L'Ecole enseigne qu'il faut les copier. Je pense que l'essentiel, c'est de retrouver leur méthode, et cette méthode n'est pas un cahier de recettes, c'est une état contemplatif où il faut se mettre. » (C. Mauclair, *art. cit.*, p. 215) またロダンは、自然に対する理解を深めないままにギリシャ彫刻の模倣を行なうだけでは、古代性にも現代性にも近づくことができず、ただ質の悪いものを生み出すだけだという主張が見て取れる。当時のブルーストがこの点に大きく共感したことは疑い得ないだろう。
- 48) H. Clouard, *op. cit.*, p. 230-241.
- 49) 吉川一義氏によれば (『モレアス』, 『ブルースト全集14』, 筑摩書房, 1986年, p. 395, 注46), この断章の執筆時期は1910年頃である。同年にモレアスが死去していることを考えれば、ブルーストが詩人の死に触発されてこの断章を書き付けたと推測することもできるだろう。
- 50) フィリップ・コルブは例えば次のような文献を挙げている。*Hommage à Jean Moréas dans la Revue critique des idées et des livres* du 25 mars 1920 ; *La Minerve française* du 1<sup>er</sup> avril 1920 [numéro consacré à Moréas] ; Jean de Pierrefeu, « Un anniversaire », *Journal des Débats*, 31 mars 1920, etc. (*Corr.* XIX, n. 4, p. 172を参照のこと)
- 51) ブルーストは1920年3月末のジャック・リヴィエール宛書簡で、モレアスに関する当時の論調の「誇張」を疑問視する旨を記しているし (*Corr.* XIX, 172 : à Jacques Rivière [30 ou 31 mars 1920]), 4月上旬にポール・モランに宛てた手紙では『スタンス集』の内容の薄さを批判し、純粋に書こうとする詩人の試みのうちに「無意識のパステイッシュ」を認めている (*Corr.* XIX, 206 : à Paul Morand [12 avril 1920])。また、同じ時期にアンリ・ド・レニエに宛てた書簡では、「モレアスの名の下になされる復興が持続するとは思えない」と書き残している (*Corr.* XIX, 214-215 : à Henri de Régnier [14 avril 1920])。

- 52) プレイヤード版の注によれば、この「復興」はシャルル・モーラスの影響によって第一次世界大戦後に高まったものとされている。ちなみに、戦後NRFの新たな編集長となったジャック・リヴィエールは、1919年6月に発表した記事のなかで、単なる模倣に終始した戦前の「古典復興」とは異なった新たな「古典復興」の到来を予告している。「Nous dirons tout ce qui nous semble faire prévoir une renaissance classique, non pas textuelle et de pure imitation, comme les disciples de Moréas et les écrivains de la Revue Critique l'entendaient et la définissaient avant la guerre, mais profonde et intérieure.」(Jacques Rivière, « La Nouvelle Revue Française », *La Nouvelle Revue Française* [Kraus Reprint], t. 13, 1919, p. 8. 強調引用者) そのリヴィエールが、ゴンクール賞を受賞したばかりのブルーストと、「古典的な伝統」「tradition classique」との関わりを論じている点も興味深い。この問題は、戦後の文学動向とブルースト受容との関わりを考える上でも貴重な材料を提供してくれるはずだ。Jacques Rivière, « Proust et la tradition classique », *La Nouvelle Revue Française*, 1<sup>er</sup> janvier 1920, p. 192-200.
- 53) 問題の重要性にも関わらず、ジャン＝イヴ・タディエが著わした大部の伝記にモレアスへの言及がないことには驚かざるをえない (Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust*, Gallimard, 1996)。なお、すでに引用した例以外にも、ブルーストは戦後に行なわれたいくつかの文学関連のアンケートへの回答のなかで、「古典」への執着を批判している。作家にとってそれは「『古典的』であろうとする子供じみた欲求」でしかなく (CSB, 645 : « Enquête sur le renouvellement du style » [*La Renaissance politique, littéraire, artistique* du 22 juillet 1922]), 「古典作家の模倣者たちは、そのもっとも輝かしいときにおいても、それ自体たいした価値のない、学識や趣味の喜びしかもたらさない」のである (CSB, 617 : « classicisme et romantisme » [*La Renaissance politique, littéraire, artistique* du 8 janvier 1921])。
- 54) André Hallays, « Senlis », *En flânant. Autour de Paris*, t.1, p. 61.
- 55) ブルーストのこうした歩みは、ビエール・ノラが大著『記憶の場』に寄せた論考で指摘した、世紀転換期における「記憶」の変質をめぐる動き——「歴史的なものから心理的なものへ、社会的なものから個人的なものへ、伝達可能なものから主観的なものへ、繰り返すものから思い出すものへ」の「決定的な移行」——と照応する。Pierre Nora, « Entre mémoire et histoire : la problématique des lieux », *Les Lieux de mémoire*, t.1, Gallimard, 1998, p. 33.

(おぐろ・まさふみ 京都市立芸術大学非常勤講師)

古典復興運動に抗して



— S. Rodman, inv. sculp.

GÉRARD DE NERVAL

# SYLVIE

SOUVENIRS DU VALOIS

PRÉFACE PAR LUDOVIC HALÉVY

42 compositions dessinées et gravées à l'eau-forte

PAR ED. RUDAUX

PARIS

LIBRAIRIE L. CONQUET

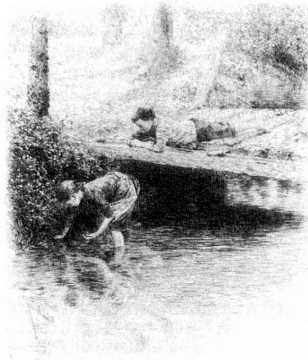
5, RUE DROUOT, 5

1886



III

Tout m'était expliqué par ce souvenir à demi rêvé. Cet amour vague et sans espoir, conçu pour une femme de théâtre, qui tous les soirs me prenait à l'heure du spectacle, pour ne me quitter qu'à l'heure du som-



X

J'ai repris le chemin de Loisy; tout le monde était réveillé. Sylvie avait une toilette de demoiselle, presque dans le goût de la ville. Elle me fit monter à sa chambre

Gérard de Nerval, *Sylvie* [préfacé par Ludovic Halévy ; 42 compositions dessinées et gravées à l'eau-forte par Ed. Rudaux], L. Conquet, 1886.